

研究概要

『ビリー・ジョエルの音楽 ―楽曲様式の変遷― 』

宇野 友子

フェリス女学院大学音楽研究科 研究生

本研究はアメリカのポピュラー・ミュージック界を代表するロックのシンガーソングライターの一人、ビリー・ジョエル(Billy Joel 1949～)の音楽の魅力を探るものである。

ビリー・ジョエルは1970年代から今日に至るまで、数多くの楽曲をヒット・チャート上位に送り込んだ。その実力は数々のプラチナ、ゴールド・ディスクを獲得し、累計アルバムセールスは1億枚以上、グラミー賞も6回受賞した。さらに2013年には国際的な活躍が認められた数少ないアーティストに贈られるケネディ・センター賞、2014年にはアメリカのポピュラー音楽に多大な貢献をしたアーティストに贈られるガーシュイン賞も受賞した。また、5つの大学から名誉博士号を授与され、2016年にはコロラド大学でビリー・ジョエルをテーマとした学会も開催された。これらの業績からも彼がポピュラー音楽史上、おそらく無視できないアーティストの一人であることは明らかだろう。

ところが彼に関する先行研究において、その楽曲面に目を向けたものは多くない。主なものにWalter Everett『The learned vs. The vernacular in the songs of Billy Joel(2000)』による、主に対照的な2曲を通して都会的洗練さと民衆的なものについて論じたものと、A. Morgan『The Other sides of Billy Joel : Six Case Studies Revealing the Sociologist, the Balladeer, and the Historian(2011)』の楽曲の題材をロマンチックな曲以外にもベトナム戦争や鉄鋼業の衰退、世界の歴史などの社会問題にも求めた楽曲の様式印象論的なものがある。しかし楽曲様式の視点から論じられた研究は発表されていない。

そこで本論文では、彼が20年以上に渡って数々のヒット曲を生み出し続けた理由を探るべく、楽曲の形式に着目し詳細な分析を試みた。分析対象曲は1971-1993年までの12アルバム、全116曲。分析方法は各曲の形式分析により、ポピュラー・ミュージックに多く見られるAABA系とAAA系に分類して行った。

全体では6：4の比率でやや複雑なAABA系が多く、1970-1980年代前半にかけても同様の比率が認められる。しかし、1980年代後半から1990年代にかけてはほぼ5：5の割合となっている。この比率の推移には時流の楽曲様式の変化が彼の曲作りに影響した可能性も考慮し、年代の異なる83年と93年の楽曲の中から同じAAA系でテンポ・時間の近い2曲を選び比較した。

本論はあえて単純に見えるAAA系の形式においても、時流の影響がどのような形で現れるかに着目している。結果、83年の楽曲は93年のものに比し、同じAAA系の形式でありながら内部に複雑性を認め、70年代に主流となった複雑な形式と不規則な反復を特徴としたプログレッシブ・ロック様式における複雑志向性の影響が推察される。また93年の楽曲は83年のものと比してやや複雑性に欠ける単調な印象をもち、80年代に主流の比較的整った形式と規則的な反復を特徴としたニュー・ウェイブ様式の単純指向性の影響も垣間見られる。

こうした曲作りは時流の音楽様式への意識とその影響によって、時代毎の緩やかな様式への変遷が現れている。70-80年代前半はプログレッシブ・ロックの影響を受けた複雑さ、80年代後半から90年代にかけては80年代の曲と同様の複合的な内部構造を持ちつつも、やや単純なニュー・ウェイブの影響が見受けられるからである。このように彼の音楽の魅力は、常に新しいロックの時流を意識し取り入れた曲作りにあると思われる。